(..)φ メモメモ

家の固定電話が鳴った。
「〇〇なんですけどー」
知らない名前だった。
咄嗟に言葉が出てこなかったので、
「どなたでしょうか？」と何だか変な応じ方になってしまった。
「何て言えばいいんですかね、えーと……」
ここらへんで何となく、「生徒さんかな」と思った。
「〇〇校で生徒だったんですけどー……」
あ、やっぱり。どっちの生徒だ？
「（私の父親の名前）ですか？　（私の母親の名前）ですか？
私の両親は二人とも特別支援学校の教師をしていた。
「あ、（私の母親の名前）です」
「母は今旅行中で三日間帰ってこないんですよね」
母は父と一緒にお遍路に行ったばかりで、何とも間が悪かった。
「電話があったことを母にお伝えしておきますね」
「お願いします」
電話を切って、母親に LINE をした。
〇〇さんから連絡があったよ、って。

こういうことはしばしばある。特別支援学校の卒業生が
両親に電話をかけてくるのだ。要件についてはいずれも知らない。
私は基本的に取次しかしないからだ。
電話を受けるときに、なんとなく「生徒さんかな」と察することがある。
そして実際そうであることが多い。
なんで察することが出来るのだろう。
どんな話しぶりの特徴から、私は「生徒さんかな」と反射的に考えているのだろう。
どんな範型的なコミュニケーションを私は内面化してしまっているのだろう。

「発達障害者っぽい話し方をする人は落とされますね」
公務員試験の面接対策講座で教壇に立つ講師が言い放った差別発言を思い出した。
「アスペルガー入ってますねー」
メンタルクリニックのヤブ医者に診断されたときのことを思い出した。
ヘゲモニックな差別的コミュニケーションスタイルを汚れたままにしておいても

何も言われない社会について、そして自分について反芻した。

「生徒さんかな」だって。

私は自分自身に眉を顰めるくらいしかできなかった。